

「桜丘すみれば自然庭園」に見る市民力とマネジメント力

誌名	ランドスケープ研究
ISSN	13408984
著者名	大江,亮一
発行元	日本造園学会
巻/号	73巻3号
巻号補足	
掲載ページ	p. 200-203
発行年月	2009年12月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council
Secretariat



『桜丘すみれば自然庭園』に見る市民力とマネジメント力

Citizen Power and Management: A Case Study of Sumireba Natural Garden

大江 亮一*

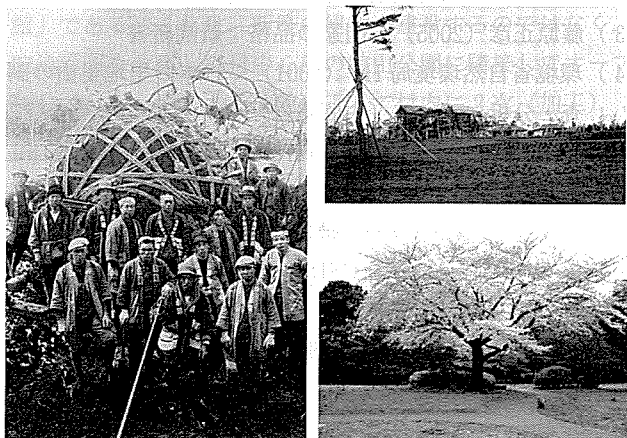
Ryoichi OE

1. はじめに

これまで長く続いた社会のシステムにきしみが生じ、変化し始めているなかで、市民と行政の関係も変わろうとしている。いま、双方に求められるのは、同じ目線で物事を見つめ、それぞれの立場で知恵と持てる能力を生かし合って、ともに課題に取り組むパートナーシップではないだろうか。市民は進んで行政の事業に参画し、行政はその働きを正當に評価し支援する。「第三の力」ともいうべき“市民力”こそが、地域に新たな活力を生む原動力になるに違いない。いま、東京・世田谷の一角にある小さな緑地では、その“市民力”と事業を推し進める“マネジメント力”が試されている。

2. それは驚きと感動から始まった

レンガ塀に囲まれ、堅く門を閉ざしたその一画は、まさにミステリーゾーンであった。すぐ横を環状八号線が走るとはいえ、その屋敷内にそびえる巨木が風に揺れるさまを見て、人それぞれに想像をめぐらせたものである。「ここは何だろう」「この中には何があるのだろう」。ある日、この“謎の空間”に住民たちが足を踏み入れるときがやってくる。そこにはぽっかりと異空間が広がっていた。コナラやクヌギ、カエデなどの雑木林に縁どられた草地にひろがるスマイレの群れ。大きく枝を広げる一本のソメイヨシノ。



各地から雑木を大量に運び入れ、多くの職人が携わり造園が行われた。
(出典：『植村家の庭園』造園の記録) / 右下：ソメイヨシノの大木

そして飛び交うトンボや蝶。小さな虫たちもいる。一瞬、時が止まったかのような不思議。車の騒音も吸い込まれる。驚きは感動に変わった。こんなに近くにこんなところがあったとは。この思いをいつまでも伝えていかなければ…。住民と行政、各分野の専門家、大学、教育関係者など、さまざまな人たちが連携し、見守る、育てる、調べる『すみれば』の原点はここにあり、この想いは今も変わっていない。

『すみれば』のルーツは昭和初期、実業家植村傳助氏が丹沢、富士山までも見晴らせたというこの地にほれ込んで、邸宅を構えたことに始まる。今の『すみれば』の3倍近くにも及ぶ6,000坪余の広大な敷地に、造園家・戸野琢磨氏によって武蔵野の風景が再現された。桃などの果樹園までもがあったという。後に、環状八号線の開通や相続等により敷地は縮小されるが、庭園は小形研三氏によって造り変えられた。芽吹きから桜、鮮やかな緑、そして美しい紅葉から冬景色へ。小形氏が工夫を凝らした、季節の移ろいを身近に感じさせてくれる見事な風景は、今もって私たちを楽しませてくれている。

傳助氏のご子息が、入学祝で小学校から頂いたというソメイヨシノの苗木は、いまでは庭園を覆うばかりに成長している。思い出の詰まったこの場所をいつまでも残せないだろうか。地域にも貴重な緑を残したい。邸宅を手放すに当たって、植村家の人たちはそんな強い思いに駆られたに違いない。世田谷区に土地の買い取りを打診した。もとより、植村家からは積極的な協力を惜しまない。庭園に関する歴史資料なども進んで開示する。その熱意は世田谷区を動かした。区内の緑被率の低下に歯止めがかからないという背景があるにせよ、厳しい財政状況下での買い取りが決まった。『すみれば』に関する立場を超えて、区民の1人としてこの英断には拍手を送りたい。残された敷地は広大とはいえないが、住民にとってはかけがいのない、大きな財産が残った。そして植村家の人たちの歴史と“思い”も受け継がれた。

それぞれの土地には、ひとつひとつの景観に歴史がある。しかし、そのほとんどは時代の流れの中で埋没し、忘れ去られていく。英国の公園では、そこがかつては何であったのかを記憶し、記録にも残すことを重要視すると聞く。造船所であったのか、荒地だったのか、誰かの屋敷だったのか。その歴史はとても興味深く、人びとの好奇心をくすぐ

*世田谷すみればネット

る。『すみれば』でも来園者によく訪ねられる。「ここはかつて何だったのですか」。「実は、ここは植村さんという方の～」と話し始めると、身を乗り出して聞いてくれる。こんな高齢の方もいる。「子供の頃、よくここで遊びました。あのあたりに鉄棒があってね」。こんどは私たちが聞く番である。私たち市民が『すみれば』に関わることは、この地に刻まれたさまざまな歴史や人びとの思いを、伝えていくことでもあるのではないか、と思う。生きものたちを見守り、そして次世代を担う子供たちにその魅力を伝える活動などとともに…。植村家の人たちと私たちとの交流は、今も絶えることなく続いている。

3. 人が集まり、やがて絆が生まれる

ミステリーゾーンに好奇心いっぱいの住民が、『すみれば』(当時の名称は「桜丘四丁目緑地」)のとりこになるまでに、それほど多くの時間は必要としなかった。世田谷区と世田谷まちづくりセンター(「まちセン」/現:財団法人世田谷トラストまちづくり)の呼びかけで始まった「自然生態調査隊」への参加がきっかけである。敷地内に息づく生態の調査をする活動に、多くの「隊員」が集まった。まだ小学生であった子供に付き添って、おそろおそろやってきたお父さん。今では活動メンバーの中心で活躍している。その時参加した小学生は、当時から旺盛な好奇心と専門家もビックリの知識でみんなを驚かせる「生きもの博士」。もうすぐ大学生である。一人また一人と参加者が増えていく。さまざまな職業の人たちがいる。地域で長く街づくりの活動をしている女性たちのグループも加わった。隊員たちは専門家の指導のもとで、植生調査や昆虫・野鳥の生息状況、花の開花状況などを調べる活動に四季を通じて参加し、緑地の自然を理解し、学ぶ楽しさを体験する。

この体験を通して、世代や職業、立場を超えた連帯の機運が生まれ、育っていった。これまでに会ったこともなく、もちろん利害関係も無い地域の人たちが、小さな緑地を中心に集い、ひとつの目標を共有することの心地よさ、楽しさを知ってしまった。水辺を造るために泥まみれになったあとの、みんなで飲むビールはことのほかうまかった。この時から、メンバーには「ボランティア」という意識はこれっぽっちも無かったように思う。行政に頼まれたからで

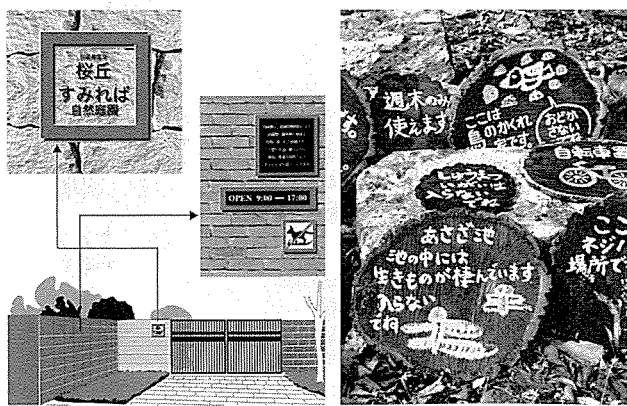
もなく、やってやるでもなく、自然に“おらが緑地”的な意識が育っていったのであろう。

4. 要求から提案へ、行政との“協働”が実った

「自然生態調査隊」と並行して「緑地づくりワークショップ」が進められた。ここでは「まちセン」のリードで緑地の整備のあり方、管理の方法、開園後の運営方法、ルール作りなど、緑地全般の課題についての話し合いが活発に行われる。もちろん、世田谷区の担当者、「隊員」をはじめ地域住民が参加してのワークショップである。毎回、テーマを設定して話し合いが行われたが、常に意識したのは、市民も行政も同じ目線を見て、考えることであった。何かと“協働”と言われるが、ややもすれば目線が行き違いがちな市民と行政である。しかし、『すみれば』プロジェクトに関する限り、これまでになかった「新しい公園」に向けて“ともに働く”意識が育っていったのでは、と思っている。

“要求する”住民から“提案する”住民へ。積極的に、前向きな提案を行った。いくつかの提案を紹介する。ひとつは公園のコンセプトでありキーワードの設定である。『生きものたちを主役に』。この公園は人が主役ではなく、植物であったり、昆虫であったり、そこに息づく生きものたちが主役でなければならない、ということである。通常、公園は人が憩い、遊ぶ場として位置づけられている。都市公園にあって、はっきりと「生きもの」を主役に置いている公園は、植物園や動物園ではない限り(人が主役のものも多いが)、それほど多くはないと思われる。住民からは、なぜブランコや滑り台を置かないのか、草地でボール遊びはダメなのか、子供たちが望んでいるのはそんな公園ではないのか、などの意見が数多く出された。このような場合、行政から説明するよりも住民同士で話し合ったことが多かったし、その方がコンセプトを納得してもらえそうな気がした。同時に“市民がつくりあげる公園”という大きな方向性をも理解してもらえたと思う。

次に提案したのは、「生きものたちを主役」にするためのルールづくりである。園内の草花や昆虫などを持ち帰らない、ペットを園内に入れないこと、園内での飲食と喫煙の禁止…。人間には少し窮屈なルールであるが、これまでのところ目立ったトラブルはない。生きものに優しい公園は、人にも優しいことを感じてくれているのであると思う。園内に設置する看板やサインについても提案を行った。区で進めていたプランを、途中で変更してもらったものもある。心地よい空間づくりに果たすデザインの役割はとても大きく重要である。「日本の公共施設におけるデザインの位置づけは、決して高くない」。そんな思いをもとに、メンバーのデザイナーが中心となって提案を行い、採用された。ここではもちろん、デザイン料は「ボランティア」である。公園のネーミングについても、区民からの公募の手続を経て、メンバーの一人が提案した『桜丘すみれば自然庭園』が採用された。緑地のシンボルとなっている「スミレ」が、いつまでも見られるようにとの願いをこめたネーミングである。もしも、私たちからの提案がなければ「桜



ネットメンバーによるシンボルマーク、生態に配慮したサインのデザイン

丘四丁目公園」になっていたかも。公園といえども、名前を覚えてもらい、人びとに愛され続けるためには、ネーミングは重要なファクターである。開園以来5年を経て、『すみれば』の名は地域にすっかり溶け込み親しまれている。

そのほか、園路のあり方や照明のこと、管理棟の設計にいたるまで、庭園づくりのプロから見れば“うっとうしい”であろう提案も数多く行ったが、世田谷区の担当者や「まちセン」などとの話し合いを経て、ベストに近いプランを組み上げていった。

5. ネットワークづくりへの思いをカタチに

開園が近づくにしたがって、運営形態のあり方が大きなテーマとなる。方向性として、ゆくゆくは区民の自主的な運命に任せることまで、区は想定していた。単なるお手伝いの関わりから、自主運営型までいくつかのシミュレーションがなされている。「自然生態調査隊」からすでに数年たって、活動するコアメンバーも10名前後になっていた。人数が絞られた分、メンバー一人ひとりの緑地への思いは大きくふくらんでいった。「いまさら“お手伝い型”には戻れない」「これからも主体的に活動を続けたい」。幾度となく、今後のとるべきスタンスを確認しながら、方向を決めていった。行政からは“組織化”に対する打診があった。行政としても、個人が相手ではともにプロジェクトを進めることは不可能である。あとには引けない。組織を立ち上げ、真正面から“新しい公園”づくりに取り組もうと決める。メンバーに異論はない。「世田谷すみればネット」の誕生である。『すみれば』を中心に広くネットワークの輪を広げよう、の願いをこめて命名した。

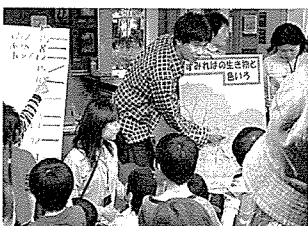
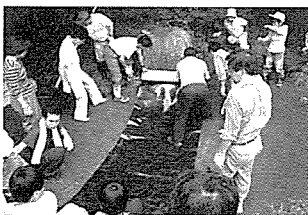
6. 多彩なメンバー、多様な世代が支えあって

「世田谷すみればネット」（以下ネット）のメンバーは多士多彩である。しかも、年齢にかかわらず、ほとんどのメンバーが現役でバリバリ働いている。あるメンバーはデザイン界の第一線に立ち、建設の世界で奮闘し、生きものの環境の保全のために日本中を歩きまわる。東京農業大学を

卒業したフレッシュなメンバーたちも、今やネットにはなくてはならない存在である。女性のメンバーは主婦でありながら仕事に、地域活動に忙しい。町内会長もいる。地域に長く根を張って、強固なネットワークをもつ。小学校、中学校やPTA、区民センターなど、地域との連携には絶対に欠かせない重要なメンバーである。仕事を持つメンバーは、活動が休日中心になることはやむをえない。しかも、それぞれが家庭を持つ。メンバーには1に仕事、2に家庭、『すみれば』は3番目、とプライオリティを明確に示している。“自己犠牲”は破綻の原因となる。無理をしないこと、そして何よりも“楽しむこと”。これが活動を長く続ける上で欠かせない。

行政のボランティア対策は、リタイアした人や専業主婦を中心に据えているように思える。日頃忙しく働く現役世代にこそ、もうひとつの自分の置き場所が必要ではないだろうか。少なくともネットのメンバーは、確実に『すみれば』の活動をエネルギーに変えているように思えるのだが。行政には、現役の人たちでもはつらつと活動できる、多様なボランティア環境づくりを検討してもらいたいものである。ここでは世代間の交流も盛んである。ネットは70代から高校生まで、幅広い年齢のメンバーで構成されている。世田谷区のシルバー人材センターから『すみれば』に派遣されている管理人も70代。仕事を通じて、大学生や若い来園者との交流を楽しんでいる。この仕事についてから、病院通いがばったりなくなったと聞く。

『すみれば』では大学との連携を深めることにも力を注いでいる。ことに東京農業大学のランドスケープデザイン研究室では開園当初から、多くの学生たちが運営に関っている。数名の学生が『すみれば』をテーマに卒業論文をまとめた。卒業生のうちの何名かはその後もネットのメンバーとして活動を続け、将来の担い手として期待されている。活動の継続に欠かせないのが、豊富な人材である事はいくまでもない。新規のメンバーを集め、育成することは大きな課題であるが、各分野の専門家による講演や他施設での研修などによって、メンバーのスキルアップを図るとともに、新たな人材の発掘に努めている。



左上より右下<ビオトープづくり><スミレ分布調査>
<東京農大ワークショップ><すみれば探検隊>の活動風景



イベント開始前のインタープリターによる自然生態に関する説明

7. 自ら考え、自ら行動するのが基本

ネットが自主的かつ継続的に『すみれば』の運営に関するうえで、インタープリターの存在が大きい。ワークショップの時点から「自然解説員」の必要性を提案した。『すみれば』はマクロ的に見ても十分に魅力的なのであるが、小さな虫、名も知れない草花にいたるまで、ここではかけがいのない財産であり、チャージングポイントである。単なる原っぱではない。ミクロの視点でここを見たとき、その魅力は何百倍にも増幅される。来園者には、その魅力を言葉で伝えたい。そんな思いからインタープリターにこだわった。『すみれば』をともに育てた生態系NPOとの連携が、インタープリターの常駐を可能にする。後に「ネイチャーセンター」となる管理棟の建設が決まっていたことも大きく影響した。展示プランやイベントなど、その空間を生かす知恵がなければ、単なる休憩所となってしまう。管理の視点だけではなく、インタープリテーションの視点で管理棟を活用するならば、これほど素晴らしい拠点はないだろう。ネットメンバーももちろんインタープリターの一員として、来園者に『すみれば』の魅力を伝える活動を行っている。

日常活動は、ネットが自主的に企画立案し、運営している。そのひとつが保全活動である。草刈りや高木、低木の剪定、池の清掃など、ネットが年間を通しての保全計画を作成する。これらは、区から業務委託を受けて『すみれば』の管理・運営にあたる「財団法人世田谷トラストまちづくり」（以下トラストまちづくり）との調整を経て実行されるが、草刈のタイミング、剪定の程度などについてはネットの提案を十分反映したうえで実施される。その連絡会議は、毎月第3土曜日に開催される。すみればネット会議も同じ日に行い、情報の共有化を図っている。

生きものの生態を守り育てるための活動も、自主的なプランニングにもとづいている。なかでも「スマイレ」と「ネジバナ」の植生調査は毎年欠かせない。毎日の日報には、花の開花、芽吹きや昆虫の生態など、その時々生きものの状態が克明に記録される。飛来する鳥の観察もそのひとつ。「トラストまちづくり」のボランティア仲間として、



園入口に置かれる、季節を告げる生きものを描いた“チョーク画”の案内板

バードウォッチング企画などでネットと協力関係にある「鳥ボランティア」のグループが、ここを観測ポイントとし、日報に記録された情報を「日本野鳥の会」に提供する。

『すみれば』は子供たちの学習の場としても位置づけている。近隣の小学校に通う児童を中心に「すみれば探検隊」を結成。『すみれば』のスペース、草花や樹木などをいっぱい使って、毎月第3土曜日にイベントを実施している。学生たちが自ら企画し実施する、ユニークなイベントも好評である。今では参加する小学生も広範な地域から集まる。また、『すみれば』を授業の教材にし、自然と生態を学ぶためのフィールドとしている小学校も増えている。今後はこれらの学校と共同で、独自のカリキュラムづくりにも取り組んでいきたい。

8. ネットワークの要を目指して

ネットは「トラストまちづくり」からの業務委託をうけて『すみれば』での活動に当たっているが、行政をはじめとするさまざまな分野の人たちとの、連携の“要”としてのポジショニングを常に意識している。ネットがハブ的な機能を果たすことによって、企画内容の多様性やコスト面などでも大きなメリットがある。各分野の専門家とのネットワークを活かした活動のひとつとして、日本全国のスマイレを集めて『すみれば』で開催した「日本のすみれ展」がある。ネットメンバーのひとりが自主的に築いた、スマイレ愛好家との交流から実現した企画である。同じ市民同士の連携ということから、スマイレ愛好家の人たちは手弁当で参加してくれている。その他、生きものの専門家を招いた自然生態に関する講座やミニコンサートなどのイベントでも、メンバーたちのネットワーク力が遺憾なく発揮される。

9. おわりに

ネットは『すみれば』を触媒として、人にも、生きものたちにも心地よい地域社会の形成を目指している。その結果、植村家の人びとから受け継いだ『すみれば』は、これからの多くの人たちの“思い”がひとつひとつ積み重なって、地域の貴重な資産として受け継がれていくものと確信している。

<世田谷区立桜丘すみれば自然庭園の概要>

開園／2004年3月
所在地／東京都世田谷区桜丘4丁目23番12号
交通アクセス／小田急線千歳船橋駅から徒歩10分
面積／6,643㎡
施設／ネイチャーセンター（管理棟）
開園時間／4月～9月 9:00～17:00
10月～3月 9:00～16:00
（年末年始のみ休園）

設置者／世田谷区
管理者／財団法人世田谷トラストまちづくり
活動の詳細はブログで。
<http://sumireba.exblog.jp>